

薬学教育における初年次教育の意義—高校生から大学1年生へ円滑な意向を目指して—

○串田 一樹¹⁾(¹⁾昭和薬大)

【はじめに】我が国の高等教育は、国際社会の一員としてユニバーサル化が避けず、今日の多様化する文化を理解した上で、次世代を社会の一員として養成する必要に迫られている。薬学では、薬学教育6年制を契機に、在籍定員が大幅に増え、少子化時代の中で全入時代を迎えたといっても過言ではない。このような背景の中で、薬学教育モデル・コアカリキュラム（以下、コアカリと略する）に基づくカリキュラム編成の他に、共用試験及び国家試験対策を推進せざるを得ないので、薬学教育6年制を高等教育として位置づけ発展させるには、学生の能動的な学習姿勢を育む初年次教育が不可欠である。

【薬学における初年次教育のあり方】薬系大学の定員は国公立系を除くと、1学年200名を超える大学がほとんどであり、入学試験（一般入試）も3教科が主流である。このような入学状況にあるので、薬学教育6年制を円滑に推進するには、早期に高校生から大学生への円滑な移行が求められている。ここに初年次教育の意義があり、薬学教育においては、コアカリにある「B イントロダクション」が該当する部分である。

【学習技術の習得とポートフォリオ】学習技術には「ノート・テーキング」に始まって多様なものが要求されるが、一方で、学生はそれらを使いこなしながら自立した学習を要求されている。さらに、最近では、学習者自身の振り返りが重要とされポートフォリオ作成が必須となってきた。この視点から、授業改善が求められている

【まとめ】初年次教育は、学生の自立を促すことであり、そのために学生の意識改革、学習技術の向上などを、カリキュラムを通して提供することにある。